

< 海外情勢 >

習近平、独裁を確立した中国共産党第 19 回党大会

藤井 巖 喜 < 国際政治学者 >

10月18日、中国共産党第19回党大会の冒頭で、習近平（共産党総書記・国家主席）は3時間24分に及ぶ長大な演説を行った。演説の言葉は、中国共産党的レトリックで満ち溢れており、これを単に字面の上で翻訳した日本語の文章を見ても、それが何を意味しているかは一般の日本人には全く理解不能であろう。

そこで筆者なりに、この「習近平演説」の本当に意味するところを分析・要約してみたい。それは以下の4点である。

▶中国共産党帝国は、対外侵略を益々加速化させる。従来も一帯一路といい、AIIBといい、中国共産党の帝国主義的侵略政策をカモフラージュする看板であったが、いよいよこういった一見、平和主義的なレトリックさえ放擲して、露骨な対外侵略を加速化させる構えである。

▶国内経済では、統制経済化を更に進める。突き詰めて言えば、解放改革政策は最早、御終いである。今後は党主導の、政府主導の社会主義経済が主要な柱となってゆく。最早、国有企業の合理化や経営改革や市場経済化は完全に逆転する。

▶国内における絶対的貧困や貧富の格差については、これを積極的には解決しない。寧ろ対外侵略戦争を行ない、内部矛盾を外部へ転嫁させる。帝国主義的な植民地化政策を行ない、国内の貧困層を積極的に海外に植民する。

▶アメリカを凌駕する世界最強の軍事国家となる。2035年までに現代化した国家を創り上げ、中華人民共和国の建国100年にあたる2049年までにチャイナを世界の一流国に仲間入りさせるという目標を習は宣言した。2035年までに正確な言葉で言えば「社会主義の現代化」を達成させると明言した。これは恐らく2035年までにアメリカを凌駕する世界の超大国になるとい

う意味であろう。即ち、経済力においても、軍事力においても、アメリカを凌駕するという意味であろう。これは 2035 年、習近平が 82 歳になるまでは、権力は絶対に手放さないという宣言である。

「新時代」を 34 回、叫んだ習近平

3 時間 24 分に及ぶ総書記としての基調報告、それは、日本風に言えば「所信表明演説」と言い換えてもよいが、その中で習近平は「新時代」という言葉を 34 回も繰り返した。この「新時代」という言葉は、かつて盛んに言われた「新中国」という言葉と対応している。即ち、毛沢東が創り上げたのが「新中国」であり、その「新中国」を「新時代」に導くのが習近平である。習近平はそう自負を込めて主張したかったに違いない。

「新中国」という言葉は、共産党が古いシナの社会を完全に革命で改め、全く新しい国が誕生したという意味である。ところが実態を見ると、新中国は言葉だけであり、そこに残っているのは相変わらずの古いシナの政治であり経済であり、文化そのものなのであった。毛沢東は暴力革命により地主階級を徹底して殺戮し、60 年代には文化大革命によって資本主義経済になびく実務家たちを徹底的に粛清した。しかしシナは何一つ変わらなかった。それが明らかになったのが、江沢民以降のこの国の現状である。

それはさておき、自らを第 2 の毛沢東に比する習近平としては、「新中国」を作った毛沢東に続いて「新時代」を築くのが自分自身であると宣言したのである。中国共産党の正史的な解釈によれば、毛沢東は建国の英雄であり、この「新中国」を豊かにしたリーダーが鄧小平である。それ故に共産党の綱領では、毛沢東思想と鄧小平理論を高く評価している。これに倣って今回の党大会では「習近平思想」なるものが入るかどうかが注目されている。習近平思想なる言葉が党綱領に正式に採用されれば、それは習近平が毛沢東にも匹敵すべき偉大なリーダーであるという格付けになる。

中国共産党の内部文章では、習近平は既に「核心」なる呼称で呼ばれている。これは過去、毛沢東と鄧小平に用いられた呼称であり、共産党内における独裁的な権力を保持していることを意味する。流石に今回の党大会では、「習近平思想」なる名称を用いることに抵抗する勢力もあるようだ。そこで「習近平思想」という直接の言い方ではなく、「習近平の思想」とか「習近平主席の指導する思想」と言った類の表現になるかもしれない。そうであるとすれば、5 年後の第 20 回党大会では、「習近平思想」なる言葉が確立するのであろう。

今回の党大会で決定する綱領で、「**習近平思想**」という言葉が使われるとするならば、それは習近平個人が圧倒的権力を共産党内で確立したことになる。勿論、その権力の寄って来るところは、軍部の掌握である。習近平はほぼ全軍を自らの人脈の人間で掌握することに成功したのだ。8月下旬における制服組トップ（参謀総長）の房峰輝の失脚は、まさにこのことを物語る。彼は江沢民派の軍内における最後の大物であった。

思想解釈の独占権

中国共産党を理解する2つのポイントは、「**チャイナの政治文化**」と「**共産主義の理解**」である。チャイナの政治が、特に漢民族の政治的行動様式がどのようなものであるかについて理解することは勿論必要である。世のあまたのチャイナ・ウォッチャーは、この点について十分に関心を払っているといつてよい。

しかしもう一点の方が欠けていては中国共産党を理解できない。それは共産主義というイデオロギーと共産党という組織の力学である。共産党の原型はソ連共産党にあり、中国共産党と言えどもそのDNAはソ連共産党から受け継いでいる。

共産主義と共産党のダイナミズムが分からなければ、中国共産党を完全に理解することは出来ない。

中国共産党というように、「**中国**」の部分だけを理解できても「**共産党**」の部分を理解できなければ、「**中国共産党**」の全体像は分からないのである。

共産党においては、思想の解釈権を手にすることが独裁権力を確立する不可欠の要素である。即ち、何が正統であり、何が異端であるか、分かりやすくいえば「**何が政治的に正しく**」「**何が政治的に正しくないか**」を決定する権利を手に入れることが独裁者にとっては不可欠の要件なのである。毛沢東思想や鄧小平思想という言葉を使う時、思想解釈の独占権が毛沢東や鄧小平にあることを物語る。

毛沢東には思想らしきものはあったが、それは思想家や哲学者の体系的な思考や論理を全く欠いている。即ち、毛沢東の戦略や信念や妄想や願望や趣向の総体が「**毛沢東思想**」と呼ばれるものなのである。

毛沢東思想が思想の名に値するかどうかはともかくとして、毛沢東思想という言葉が用いられるという事実は、毛沢東が政治的正当性の決定権を独裁的に手にしていたことを意味する。鄧小平理論についても同様である。

「**理論**」というのは「**思想**」よりやや格落ちする言葉であるが、鄧小平時

代には鄧小平が全面的な正当性の解釈権を手にしていたことを、この言葉が物語っている。鄧小平が実際に行なったのは従来の社会主義経済の破壊であり、所謂「解放改革経済」であった。外国の資本と技術を導入し、これをチャイナの低賃金と合わせて国の経済発展を図ろうというのが、鄧小平がやったことである。

実際にやったのは「社会主義経済の破壊」なのだが、それでは毛沢東時代からの連続性と正当性が確保できない為、「社会主義市場経済」なる奇怪な言葉や、「中国の特色ある社会主義」なる意味不明の概念を捏造せざるを得なかったのである。

習近平思想なるものに何らの思想的・哲学的実体がないことは明らかである。それが意味するのは、共産党の政治的統制の強化と「解放改革経済」を方向転換し、統制経済化を進めることに他ならない。しかし、習近平思想なる呼称が党綱領に織り込まれれば、それは習近平個人が完全なる思想の解釈権、即ち正当性の解釈権を自らの手中にしたことを意味する。

実力部隊である軍は、既に自らの掌中にしたのであるから、これに思想の解釈権の独占を加えれば、独裁権力を完全に確立したことになるのだ。

ひな壇上における習近平、胡錦濤、江沢民の距離感

習近平が3時間24分に及ぶ大演説をした前後のひな壇上の江沢民と胡錦濤の反応は、中々興味深いものであった。胡錦濤と習近平の仲は良好であり、江沢民と習近平の仲は極めて冷淡であった。自らの人脈を次々と粛清され、利権と権力を習近平によって奪われていった江沢民は、勿論、苦々しい思いで壇上に座っていたに違いない。ただでさえ無表情で妖怪のような江沢民の顔は一層、青ざめて見えた。一方、演説後、胡錦濤はにこやかに習近平と短い会話を交わしていた。胡錦濤は腕時計を指して何か習近平に語り掛けたようだった。恐らく3時間半に及ぼんとする演説の長さについて何か言ったのであろう。

胡錦濤の顔から伺えるのは、この人が完全に権力を失ってしまい、政界では「上がり」になってしまったということだ。江沢民と習近平の間に挟まり、遂に個人独裁権力を確立できなかったのが胡錦濤であった。習近平が江沢民を追い詰めてゆくのに、胡錦濤は寧ろ積極的に協力した節がある。初めの彼の反応はともかく、胡錦濤としては習近平の権力掌握に抵抗せず、寧ろ権力集中に協力姿勢をとることで、自らがサバイバルしたと言えるだろう。

思えば胡錦濤が打ち出した路線というのは、習近平に比べれば甚だ穏健なものであったと言えるだろう。胡錦濤に関連して思い出される政治的用語は

「**和平崛起**」と「**和諧社会**」の2つである。

「**和平崛起**」とは、チャイナはアメリカを凌駕する世界一の覇権国になるが、それに際してそのプロセスは戦争を伴わない平和的なものであるという概念である。日本語では「**平和的台頭**」と一般的に訳されていた。即ち、米中戦争に勝利するのではなく、自然な流れで経済でも軍事でもチャイナの力がアメリカを上回り、チャイナが世界一の覇権国になるという道筋である。いたずらにアメリカと覇権を争わず、国際的には協調路線を歩むという方向性がここにはあった。

「**和諧社会**」というのは、江沢民時代に既に極端になりつつあった貧富の格差を何とか縮めようという考え方である。極端な格差をなくし、調和的な社会をつくるという単純なスローガンである。そしてこれらを推進する為には、先進国の企業からも評価されるような市場経済化を徐々に進めてゆくという考え方が基本にあった。

今にして思えば、胡錦涛路線は甚だ穏やかなものであったと言えるだろう。しかし最早、「**平和的台頭**」論も「**和諧社会**」論も完全にその姿を消してしまった。習近平が独裁的権力を確立した。恐ろしい時代が日本にやってくる。